

‘Play Day’の成立過程とその理念

～1900年代前半のアメリカにみる女性スポーツ教育を手がかりとして～

荒井啓子（学習院女子大学）

キーワード：‘Play Day’、女性、スポーツ、反競争運動、レジャー・レクリエーション

1. はじめに

大学、とりわけ女子大学におけるレクリエーションのひとつに、「プレイデー」という行事がある。この趣旨は、「学生と教員との親睦や新入生歓迎などの意を込めて、勝敗にこだわらずにスポーツに興じる1日」というものである。これは、1900年代前半のアメリカで提案され実践された、女性を対象としたレクリエーション性の高い（競争性を除外した）スポーツの催し物である‘Play Day’に端を発しているといつてよいであろう。近年、「プレイデー」には様々な変容がみられているが、現代の女子大学生のレジャー・レクリエーション教育を考える、ひとつの材料として捉えることができよう。

他方、周知のとおり、近年、女性のライフスタイルは著しく変化し、多様化してきている。それに伴い拡大した自由時間を、いかに充実させるか、あるいはどのようにデザインするか、という問題が重要視されている。したがって、各自のライフスタイルに応じて、自由時間を主体的に活用していく能力は、今後さらに求められるところであろう。これを受けて、女子大学では、女性の多様化・個性化するライフスタイルを考慮し、レジャー・レクリエーションへの自律的な能力の育成へ向けての教育が必要と考えられる。

そこで、本研究では、現代の「プレイデー」の発端と考えられる1900年代前半のアメリカにおける‘Play Day’を取り上げ、文献を用いて、その成立過程を時代背景に照らしながら考察し、加えてその理念や内容を明らかにすることによって、現代の女子大学におけるレジャー・レクリエーション教育を検討するための一資料とすることを目的とする。

なお、Play dayの意味には、いくつかの捉え方がある。たとえば、①学校の休日（holiday）、②仕事の（あるいはストライキ中の）休業日、③幼児・児童ための遊びの日などである。ここでは、先に述べたように、1900年代前半にアメリカにおいて女性を対象として提案されたスポーツ行事を取り扱う。したがって、それを‘Play Day’と表記して論を進めていく。

2. 時代背景－1900年代前半のアメリカにみる女性のスポーツ行動

1900年代前半は、女性－スポーツにとってどのような時代であったのだろうか。近代オリンピックの足跡をたどれば、1898年に開催された第1回アテネ大会には女性の参加が認められなかったという事実がある。それは、提唱者であったクーベルタンの意向でもあったと言われるが、この時代の女性観によるところが大きかったのではないだろうか。第2回パリ大会（1900年）では、テニスとゴルフのみが「女性にふさわしい種目」とされて参加が認められたが、陸上競技への風当りは強く、女子の種目としては排除され続けた。この風潮に変化の兆しが見えたのは、1928年に開催されたアムステルダム大会からであり、ここで初めて女子の種目に陸上競技が導入され、これ以降次々と参加種目が加えられていた。このような、オリンピックという社会を反映するスポーツ事象からもうかがえるように、1900年代前半は、「女性が走ること」や「女性が競うこと」についての是非が問われると同時に関心も寄せられていた時代であった。

アメリカで女性がスポーツに参加し始めたのは、1800年代後半である。有閑階級における社交の場が、舞踏会から屋外におけるスポーツ活動へと拡がってきたためである。したがって、女性たちは「男性の同伴者」としてスポーツに参加した。主な参加種目は、アー

チェリー、ローンテニス、クロッケーなどであった。これらはどれも一様に、激しく走り回ることがないため、当時の女性の装いであったクリノリンスカートや、からだを締めつけるコルセットなどを身につけていてもプレイすることができたのである。このような、女性のスポーツへの関わり方は、当時のアメリカ社会の伝統的な「女性観」や「女らしさ観」に因るところであり、身体活動性や競争性そして社会性とは無縁のものであった。

上述のような女性スポーツ観は、1900年代に入ってから簡単には変化しえないものであった。しかし、1920年、婦人参政権が認められ、女性が社会における平等の一端を獲得していく過程において、ごく一部の女性たちではあったが、テニス、ゴルフ、水泳などに優れた能力を発揮した。彼女たちは、伝統的な社会通念を意識しながらも、男性競技者と同様の勝利欲をもち、社交的なレベルから競争的なレベルへと女性のスポーツを変化させていった。

3. 'Play Day'の成立過程－「反競争運動」をきっかけとして

わずかに高まり始めた女性たちの競技志向に反して、1920年代から1930年代にかけて、競争的なスポーツを押さえようとする運動が起こった。「反競争運動」(Anti-Competitive Movement)である。これは、女性体育教師による運動で、主に陸上競技に向けられていた。その理由は、「女性のスポーツの中で、少数のものが名声と偉業を打ち立てるのに多数の少女や女性を犠牲にする競技制度の悪と考えられたものを陸上競技が象徴していた」というものである。運動のスローガンは「全ての少女のためのスポーツ、全ての少女をスポーツの中に」(“A sport for every girl and every girl in a sport”)であり、スポーツの競争性と少数エリート性に反対したものである。

このような動きを受けて、高校や大学では、特にスポーツに秀でた女子だけが注目される選手権大会への出場や、彼女たちが学校その他の宣伝に使われてスポーツが商業化していくことを避けようとする方針が打ち出された。また、スポーツは個人の社会化のために価値があり、職業化のためではないという考え方により、高校および大学間の対抗戦に参加して名声を得るのではなく、学内で行われるスポーツ行事としての'Play Day'に参加することが推奨され始めたのである。

4. 'Play Day'の理念と内容

さきに述べたように'Play Day'は、「スポーツは個人の社会化のために価値があり、人々の注目を引きつけて商業化するものではない」という考え方に基づいている。したがって、競争を強調せず、特別なスポーツエリートが注目されるものでもなく、全ての女性が競技を楽しむことが主張されている。内容は、いくつかの学校が集まって、様々な球技や水泳、リレー、フォークダンスなどを行っていた。各学校間では競い合わず、メンバーを当日に決めたり、他の学校の生徒あるいは学生との混合チームを作って行われた。また、クッキーやジュースが用意された休憩時間によって、社交的な機会が重視された。しかしスポーツの技能に優れた学生にとっては物足りない行事だったかもしれない。

5. おわりに

'Play Day'は、その成り立ちの経緯はともあれ、勝敗や技能の優劣にこだわらずスポーツを楽しむ一日であったのではないだろうか。現代におけるスポーツの目的は多様化し、個々によって異なっている。しかし、どのような目的にしても、disportから引き出される自己解放の意味合いをもつ「楽しさ」を除くことはできないであろう。大学、とりわけ女子大学において、自らが主体的に運営・実行していく「プレイデー」を通してスポーツの「楽しさ」を見いだししていくことは、多様化した女性のライフスタイルをを自律的に創造するための貴重な体験になるように思われる。「プレイデー」を通したレジャー・レクリエーション教育の再考が必要であり、そのための資料として全国レベルでの現状把握が今後の課題として考えられるところである。